

犯罪被害者支援における支援者の 態度変容過程に関する一考察

— ボランティアスタッフの体験の意味づけの変化に着目して —

安 達 泰 盛

〔抄 録〕

現在の民間機関での犯罪被害者支援の主な担い手はボランティアとなっている。しかし、犯罪被害者支援の研究の中でそのボランティアに着目した研究はまだ見られない。本論文では、ボランティア参加者の語りに着目し彼らが活動を通してどのようなことを感じているか、その体験の意味づけがどのように変容しているかという点に注目し、その流れを明確化させることを目的とした。ある犯罪被害当事者の会の主催する集会にボランティアとして参加した人を対象としインタビューを実施し、データとした。データの整理はKJ法を参考した。整理の結果、参加者の語りの内容は、参加前、参加している間、参加後、現在、得たもの、その他という6つの段階に分かれることが明らかになった。6つの各段階において参加者の態度変容を詳細に図示し、その結果から見えた参加者の態度の変容について考察を加えた。

キーワード 犯罪被害者支援、支援者、態度変容過程、体験の意味づけ

1 章 序章

1. はじめに

犯罪被害者は、「忘れ去られた存在」(瀬川、2000)⁽¹⁾と言われた時期があった。しかし、阪神大震災・地下鉄サリン事件などの災害や事件を契機として災害や事件に遭遇した人が心身ともに苦しむという事実が認知・理解されその後の犯罪被害者支援の発展に繋がった。その後いくつもの法律も制定され犯罪被害者の位置付けは大きな変化を示している。司法による支援だけでなく、民間機関による被害者支援も広がりを見せている。しかし、その担い手の多くはボランティアに頼っている。民間支援活動の担い手が、ボランティアであることに多田(2000)は「考えようによっては、大変奇異なことである」と述べた上で、専門家・ボランティアの利点をそれぞれにまとめている。⁽²⁾金子(2006)は国や地方公共団体が取り組むべきであるとしつつも、小回りの利かない部分はボランティアで補うべき部分も多いと、この状況に一定の理解を示している。⁽³⁾

2. 問題と目的

前節より、犯罪被害者支援の現状では、民間支援団体におけるボランティアの存在が非常に重要であることがわかる。しかし、被害者支援に関する研究は、犯罪被害者や遺族に焦点が当てられたもの、被害者支援全般に関するものが大半である。ボランティアに限らず犯罪被害者の支援者に関する研究に目を向けても、二次受傷やバーンアウトに関する研究があるだけである。犯罪被害者支援に関する研究には、ボランティアの養成の大切さが強調されているものが多くあった。このようにボランティアの養成の大切さが示唆されているが、参加している人たちに目が向けられていないのが、現在の被害者支援に関する研究状況であると言える。

筆者は被害者支援に携わる人たちの養成には何が必要かを考えていくことを研究のテーマとして考えた。その為には実際にボランティアとして活動をしている人たちの実情を正確に知る必要がある。そこで本論文では、ボランティア活動を行っている1人1人の語りに着目して進めていく。彼らの語りをもとにして、年齢・専門・動機などが異なる参加者たちが活動を通してどのようなことを感じているか、その体験の意味づけがどのように変容しているかという点に注目し、その流れを明確化させることを目的とする。

このように体験の意味づけの変容過程を明らかにすることは、ボランティア参加者の支援者としての成長過程を示す1つの手がかりとなると考えられる。また、民間支援の主な担い手であるボランティア参加者の実情が明確に示されず行われている現在の被害者支援を考えたときに、本研究を行うことは今後、より実践に即した支援を行っていくために必要である。そうした点で、本研究は臨床心理学の研究として意味があると思われる。

2章 方法と分析

1. 調査対象

本研究では、ある犯罪被害当事者の会が年に1回開催する集会にボランティアスタッフとして経験を持つ人を調査対象とした。面接調査を行ったのは、11名（男性7名、女性4名）で、大学1回生から社会人までである。対象者の詳細については表2-1に記載した。

今回調査協力を頂いた会は、子どもを殺された家族が集まって結成された会である。当初は4家族だったが、現在では30以上の家族が参加している。この会では子どもたちの追悼・被害者側の現状を多くの人に知ってもらうことを目的とし年に1度集会を開いている。⁽⁴⁾

集会の主な運営は、大学生を中心としたボランティアスタッフによりなされている。ボランティアスタッフの多くは集会当日に来て運営に携わるが、集会に先立ち、準備会と呼ばれる打ち合わせが数回行われている。準備会から参加したボランティアスタッフは集会の運営上の仕事の責任者となり、当日参加のボランティアスタッフと協力して集会を運営していく。

以下、この犯罪被害当事者の会が開催する集会のことを会と呼ぶこととする。

表 2-1 参加者プロフィール

	職業	回生	性別	専攻	参加回数	参加方法	備考
A	大学院	M 2	男	臨床心理	1 回	当日のみ	
B	大学	4	女	臨床心理	2 回	当日のみ	2 回面接を実施
C	大学院	M 2	女	法学	1 回	準備会から	
D	大学	4	男	心理	2 回	準備会から	
E	大学	4	男	法学	4 回	準備会から	
F	大学	4	男	心理	2 回	準備会から	
G	社会人		女		7 回	準備会から	病院での勤務
H	社会人		男		2 回	当日のみ	心理職で勤務
I	大学	3	女	心理	1 回	準備会から	
J	大学	1	男	心理	1 回	準備会から	
K	大学	1	男	心理	1 回	準備会から	

2. 調査方法

調査は、2007年 9 月～10月にかけて行われた。調査の大半は筆者が所属する大学の面接室を利用して行われたが、一部の面接は、対象者が通う大学の教室を使用して行われた。データは 1 時間から 2 時間半程度の半構造化面接により収集された。次項に示したような質問を用意したが、語り手の語りを妨げないよう調査面接を進めていった。何が起こったという事実だけでなく、参加者がどのような感じを持っていたかを促すような質問を重ねていった。

対象者への依頼は、面接への参加は自由であること、面接最中であっても中止を求められること、回答を拒否することができること、面接中に録音の停止を求められること、希望すれば記録の閲覧ができること、データの管理は筆者が責任を持って行うこと、論文として公表する際、個人が特定されないように、最大限の配慮をすることをした明記した書面を提示し行った。また、面接内容は面接開始時に対象者の了承を得て、ICレコーダー 2 つに録音した。

3. 質問項目

会への参加、参加中、参加後の参加者の会への思いを語ってもらいやすいよう、以下のような質問を用意した。

- 会を知ったきっかけと参加への動機
- 参加前、会に対してどのようなことを感じていたか
- 会に参加当初どのようなことを感じていたか
- あなたにとって会はどのような存在か
- 会への参加を通じて印象的だったことはなにか

4. 分析方法

本研究のデータは、実施した11人12回分（対象者Bのみ時間の関係上面接を 2 回実施）の面接すべてを、筆者の発言も含めてすべて文字化した逐語録である。そのデータの整理にあたってはKJ法（川喜多、1967）⁽⁵⁾を参考にした。11人の対象者のうち、参加回数の異なる 3 人分

（対象者A, E, G）のデータから、対象者の体験が語られていると思われる語りを切り取り（これを切片化という）、それぞれを1つのカードとした。1つのカードには1つの内容だけが含まれるようにし、短いもので一文節、長いものでは数文となった。3人分のデータでカードは320枚作成された。作成されたカードに何度も目を通した結果、語りの内容、言葉遣いなどが同じものに触れていると感じられたものを1つのグループとし、それらの発言に見合う名称をつけた。これを繰り返し、カードを整理していった。

この段階で、整理された結果を見ていくと、参加者の体験の語りには参加前・参加最中・参加後・現在（次へ向けて）・自分の活動へ・その他、という6つの段階があること、また、参加者の語りの内容が、会そのものについて・その他のスタッフについて・会での仕事について・遺族についてという4つに分類することができることが読み取れた。

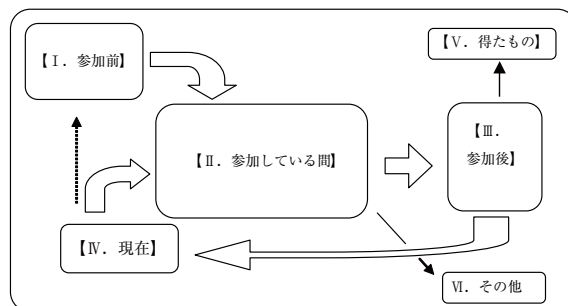
この結果を受け、残りの面接データを切片化し、それぞれを1つのカードとした。そしてカードを6つの段階と4つの語りの内容ごとに振り分け、再びKJ法に基づき整理した。なお、11人分の面接から作成されたカードは885枚であった。

結果の整理にあたり、切片化したデータを最初に整理したものをグループと呼び“ ”で示す。そして“グループ”同士を整理してできたものを概念と呼び《 》で示す。そして、《概念》や“グループ”を含めて整理したものをカテゴリと呼び『 』で示す。そして、それらを1つに整理したものを段階と呼び【 】で示す。次章より〔アルファベット－数字〕（例〔A-1〕）という記述が随時出てくる。アルファベットは表2－1の対象者、数字は筆者がデータを切片化した際の番号を示している。

第3章 結果

分析の結果、参加者の語りの内容は、【Ⅰ．参加前】、【Ⅱ．参加している間】、【Ⅲ．参加後】、【Ⅳ．現在】、【Ⅴ．得たもの】、【Ⅵ．その他】という6つの段階に分かれることが明らかになった。図3－1は6つの段階の流れを図示したものである。本章では、各段階において参加者の態度がどのように変容していったのか詳細に示していく。

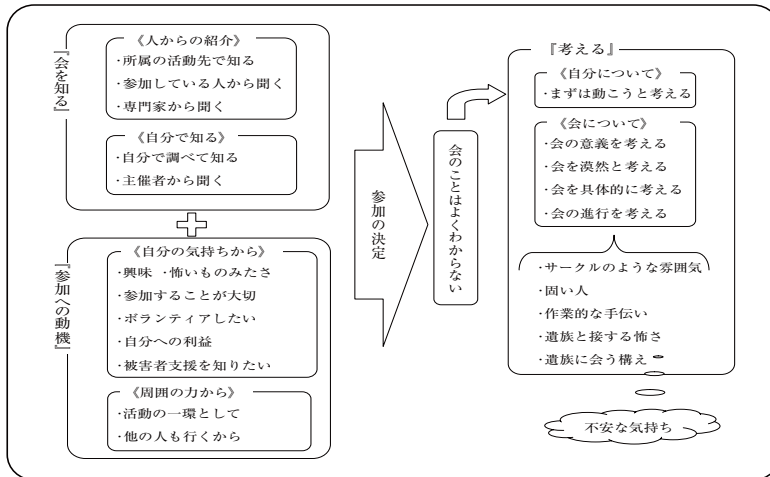
図3-1 参加段階による参加者の態度変容過程



1. 会に参加するまで

図3-2は【I. 参加前】という段階の詳細を示したものである。この段階は、参加者が会の存在を知り、会に参加するまでの態度が示されている。

図3-2 会参加前の参加者の態度



会の存在を知るのには《人からの紹介》と《自分で知る》という2つの方法があることが明らかになった。《人からの紹介》という概念には“所属の活動先で知る”、“参加している人から聞く”、“専門家から聞く”というグループが含まれている。「サークル活動の一環として…先輩から聞いて [E-1]」、「先生からの紹介 [D-1]」とあるように既に会と関わりを持っている人から紹介され会の存在を知っている。一方、《自分で知る》という概念には“自分で調べて知る”、“主催者から聞く”という2つのグループが含まれている。“自分で調べて知る”というグループは、対象者自身の体験ではないが、「インターネットだけ見て来ましたという人がいた [G-121]」と自分で調べて会に参加した参加者の存在が語られているものを受けて作成した。《人からの紹介》、《自分で知る》という概念を集めて『会を知る』というカテゴリーとした。

会の存在を知ってから参加に至るためには《自分の気持ちから》と《周囲の力から》という2つの概念が含まれる『参加への動機』が必要である。《自分の気持ちから》という概念には“興味”、“怖いものみたさ”、“参加することが大切”、“ボランティアをしたい”、“自分への利益”、“被害者支援を知りたい”というグループが含まれる。「ボランティアみたいなのはやってみようと思っていた [J-3]」、「こういうのもあると知ったほうがよりよいものが出る [B-6]」と語るように会の参加に対し自分の中で感じる場所があることが示されている。一方《周囲の力》という概念には“活動の一環として”、“他の人も行くから”というグループが含まれている。「先輩も行くし、周りの子も行く [I-34]」、「サークルでやっているから、いいチャンス [K-58]」と語るように参加の理由を自分以外の存在に求めていることが示されている。

これらを見比べると会に参加する態度としては、自分の中で思うところを動機とする参加をしている《自分の気持ちから》のほうが、《周囲の力》を動機にしているよりも、参加への思い入れは強いのではないかと感じられる。

参加前、参加者たちは「どんなことをするのかわからない [D-5]」、「行ったらわかるみたいな感じ [F-5]」というように“会のことがわからない”状態にあることが多く語られている。「情報を得にくい [K-90]」というように、参加者が事前に会について知る方法が少ない、「なにかいつも急… [F-7]」というように、活動予定が見えていない状況も、参加者に、よりわからない感じを与えているのではないかと考えられる。

わからない状態にある参加者は、様々なことを『考える』。考える対象は《自分について》と《会について》があり、《自分について》という概念には“会の意義を考える”、“会を漠然と考える”、“会を具体的に考える”、“会の進行を考える”というグループ、《会について》という概念には“まずは動こうと考える”というグループが含まれている。わからないものに対して、『考える』ことで、自分の中で落ち着きを持たせようとしている状態とも考えられる。

よくわからない会について考えた彼らだが、「周りの方とうまくいかなかったらどうしよう、自分1人動けなかったらどうしよう [I-33]」や「法律の話ばかりしているのかと思っていた。そこらへんが不安だった [J-24]」と語り“不安な気持ち”があったことも示された。

2. 参加している間

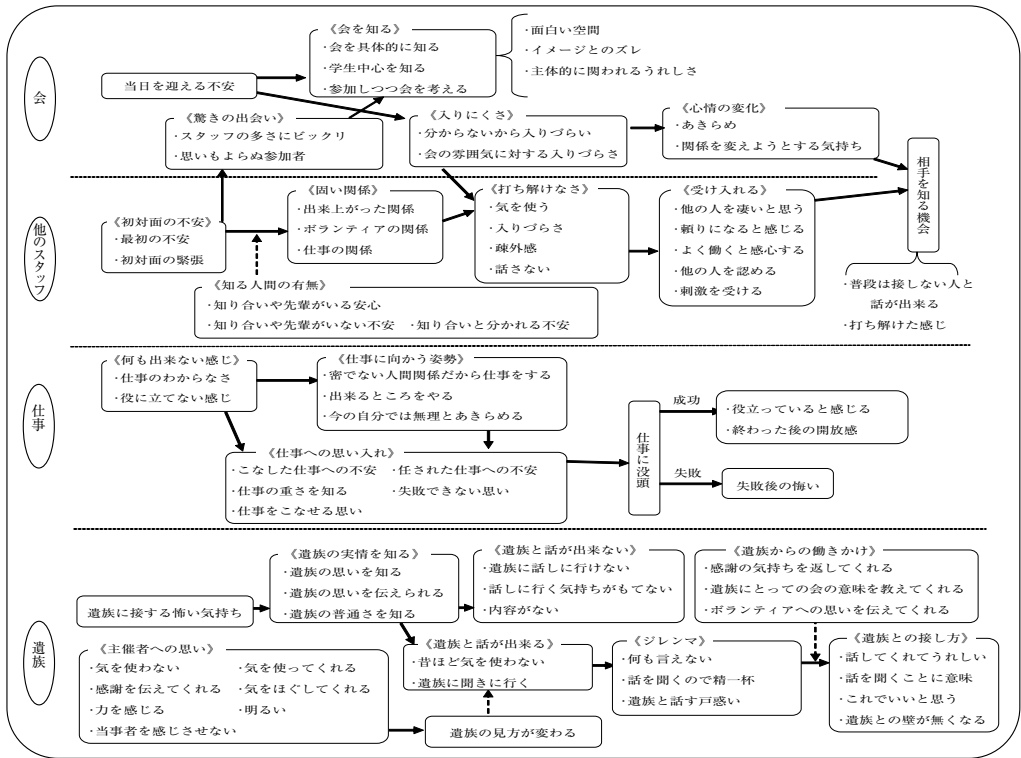
図3-3は【Ⅱ. 参加している間】という段階の詳細を図示したものである。参加者が会に参加をする中で、会・他のスタッフ・仕事・遺族に対してどのようなことを感じ、態度がどのように変容したかを示したものである。

前節で、参加を決めた参加者が、参加前に“不安な気持ち”を抱えていることが示された。図3-3を見ても、“不安な気持ち”は、会に対しては“当日を迎える不安”、他のスタッフに対しては《初対面の不安》、仕事に対しては《何もできない感じ》、遺族に対しては“遺族に接する怖い気持ち”と参加当初も引き続いていることが明らかになった。この節では、会への参加段階が進むにつれて、参加者の態度がどのように変容していくかを語りの対象別に見ていく。

1) 会について

“当日を迎える不安”を感じていた参加者は、参加をする中で《会を知る》ことになる。この概念には“会を具体的に知る”“学生中心を知る”“参加をしつつ会を考える”というグループが含まれる。《会を知った》参加者は、“面白い空間”、“イメージとのズレ”、“主体的に関われるうれしさ”という感じを受けることがわかった。主体的に関われることについては「雑用より、積極的に参加したほうがよかった。うれしかった [J-11]」というように肯定的にとらえる語りが多く見られた。

図 3-3 会参加最中の参加者の態度



参加者は当初、会に対して《入りにくさ》という感じを受けている。この概念には“わからないから入りづらい”、“会の雰囲気に対する入れなさ”というグループが含まれている。「何も話していいか、分からなくて、おとなしくならざるを得ない [D-61]」というように、何も出来ない感じが伝わってくる。この概念は、参加者の意識の変化とともに、他のスタッフを対象にした語りとも関連しているため、詳細はそちらに譲る。

2) 他のスタッフ

“初対面の緊張”“最初の不安”というグループが含まれる《初対面の不安》を感じていた参加者は、他の参加者と出会い、スタッフ間の《固い関係》というものに直面している。その概念には“出来上がった関係”、“ボランティアの関係”、“仕事の関係”というグループが含まれている。この《固い関係》という概念と、会の中で感じていた《入りにくさ》という概念がつながり、“気を使う”、“入りづらさ”、“疎外感”、“話さない”というグループが含まれる《打ち解けなさ》という感じを受けていることがわかる。このときの参加者は「ずっと気を使ってなきゃいけない。相手も気を使うところもある。なんか大変そう [K-20]」、「結構疎外感があった [E-23]」というように、他のスタッフと打ち解けておらず、居心地の悪さを感じていることが語られた。そうした《打ち解けなさ》を感じていた参加者の中で、時間の経過にともない「ち

よっと知り合いになりたかった [D-53]」という“関係を変えようとする気持ち”や“あきらめ”というグループが含まれる《心情の変化》があらわれている。そして、“相手を知る機会”があれば“打ち解けた感じ”を得るまで変化している。

また、参加者の参加度合いを変化させる要因に《知る人間の有無》という概念が存在している。“知り合いや先輩がいる安心”、“知り合いや先輩がいない不安”、“知り合いと分かれる不安”というグループが含まれている。「友達も同じ仕事だったので心強かった [D-36]」、「先輩があっちの仕事してたらどうしよう [K-16]」というように先輩や知り合いの存在というのは、参加当初の参加者にとっては特に重要であることもうかがえた。

他のスタッフの関係を《固い関係》と感じていた参加者であったが、その人たちを《受け入れる》という感じを持ち始めることも示された。「すごい人だなあ。会う人、会う人全部すごい [B-48]」と感じる“他の人を凄いと思う”、「頼りがいのある人らがいっぱい来て、サポートしてくれて、心強かった [D-46]」と感じる“頼りになると感じる”、“よく働く后感心する”、“他の人を認める”、「負けてられないという感じ [F-106]」を持つ“刺激を受ける”というグループが含まれている。そして相手を知る機会を経て“打ち解けた感じ”、“普段は接しない人と話ができる”という感じを得ている。そして、この思いは会の中で感じていた“面白い空間”という感じにも繋がっている。

3) 仕事

参加当初、参加者は“仕事のわからなさ”、“役に立てない感じ”を持ち、《何もできない感じ》を持っている。「まったくわからない…話にも入れず、俺これ必要な？ [D-40]」、「何したらいいんだろうという感じ。居心地が悪いというか、自分邪魔なんじゃないか [B-14]」と語り、仕事ができないことに對し、自己否定的な感じも受けていることがうかがえる。

仕事を与えられた中で、参加者は徐々に《仕事に向かう姿勢》を持ち始める。ここには“密でない人間関係だから仕事をする”、“出来るところをする”、“今の自分では無理とあきらめる”というグループが含まれている。「密ではない人間関係だからこそ、そういうの（仕事をがんばるという気持ち）を選ぼうと思った [K-63]」とあるように、他のスタッフとの関係が密でないから、人と関わりを持たなくてもよい仕事に向かう気持ちが生じたり、「仕事の話になって始めてそこら辺ががんばりますみたいな [D-15]」というように、仕事については自分でも出来るから、そこはしっかりやろうという態度が生じている。

仕事をこなすことで参加者は《仕事への思い入れ》を持ち始める。“こなした仕事への不安”、“任された仕事への不安”、“仕事の重さを知る”、“失敗できない思い”、“仕事をこなせる感じ”というグループが含まれている。「ミスったらかなりヤバイ…、結構大変なことをやっている [K-47]」というように仕事の重みや「失敗したらあかん [E-6]」というように、失敗してはいけないという思いを感じている。ボランティアという立場である彼らには義務や責任というも

のは存在していないが、「ボランティアなのに、失敗するってことは、そういう意思がないとみなされそう [J-52]」というようにボランティアであるが故に責任を感じていることも語られた。「もともと義務じゃなかったのに、自分からわざわざ選んだから、かえって強く、失敗したらいかんと思いました [K-53]」と語る参加者もいた。参加者はこのようにして、会の仕事に対して自分なりの会への態度を持ちつつあるのではないかと感じられる。

“仕事に没頭”し、過ごしている参加者は自分の仕事が上手くこなせていると「作業としての不安はあったけど、役に立ってるんじゃないかな…。とりあえず邪魔はしてないんじゃないかな [B-17]」というように“役に立っている”という感じを受けている。そして、「これで終わりと言うタイミングがあった。そこですごく開放された [K-88]」というように仕事を終えた段階で“終わった解放感”を感じている。

反対に、自分の仕事で失敗をしてしまった時には“失敗後の悔い”という気持ちを感じている。「本当に申し訳ないなあ [K-51]」や「それ（失敗）だけが心の残り [E-14]」というように失敗に対する悔いが非常に強いものであることがうかがえた。しかし、その思いがあるからこそ「次は絶対に（失敗）しないようにしたい [D-75]」と次への強い意欲となって現れていることも語られた。

4) 遺族

“遺族に接する怖い気持ち”を感じていた参加者は、会を通じて《遺族の実情を知る》という体験をする。この体験には“遺族の思いを知る”、“遺族の思いを伝えられる”、“遺族の普通さを知る”というグループが含まれている。「一言一言が、本当にズシーンと。受け止めるのがつらいと言うか [K-75]」というように遺族の思いを知ること、そういう思いをしている遺族でも「楽しくしたらダメというあれはないんですけど。それで、見方も変わった [F-15]」というように今まで考えていた遺族の姿とは異なるイメージを持ち始めていることが示された。

《遺族の実情を知る》経験をした参加者は《遺族と話が出来る》と《遺族と話が出来ない》という双方の思いを抱えている。《遺族と話が出来ない》という概念には“遺族に話に行けない”、“話しに行く気持ちがない”、“内容がない”というグループが含まれている。「話しかけにくいから行けなかった。行く気もなかった感じ…話す内容がない [K-90]」と遺族に対し、自分から話をしにいくという態度がまだ生じていないことが見て取れる。

一方《遺族と話が出来る》という概念には“昔ほど気を使わない”、“遺族に聞きにいく”というグループが含まれている。「気を使うでしょうけど、最初の頃ほどではない [E-95]」や「(遺族と) 話し出したら(事件のことを) 聞く [E-97]」と語るように遺族に話しに行ける態度に変容していることがわかる。

しかし、遺族と話す参加者も遺族と話をすると“何も言えない”、“話を聞くので精一杯”、“遺族と話す戸惑い”を感じていることがわかる。これらのグループを集めて《ジレンマ》とい

う概念とした。参加者は「聞くことしか出来なくて、どうしたらいいんやろうと思うときもあった [G-71]」、「声をかけなきゃと思うがかける言葉が無い [G-74]」というような《ジレンマ》を感じている。そんな参加者に遺族は《遺族からの働きかけ》を行っていることがわかった。この概念には“感謝の気持ちを返してくれる”、“遺族にとっての会の意味を教えてくれる”、“ボランティアへの思いを伝えてくれる”というグループが含まれている。「聞いてくれてありがとう [G-42]」、「私たちここでしかしゃべれないから、聞いてくれるだけでいいと（遺族が）言ってくれた [G-43]」という遺族からの働きかけを受けた参加者は、感じていた《ジレンマ》が解消され、「私に話してくれたって思ったら、すごく嬉しくて [G-63]」と感じる“話してくれてうれしい”気持ちや“話を聞くことに意味”があると感じたり“これでいいと思う”ことが出来るようになったり、「繰り返ししていく間に、（遺族との壁が）だんだん無くなってた [E-49]」というように“遺族との壁が無くなる”感じを得ることができている。これらのグループをまとめて《遺族との接し方》という概念とした。

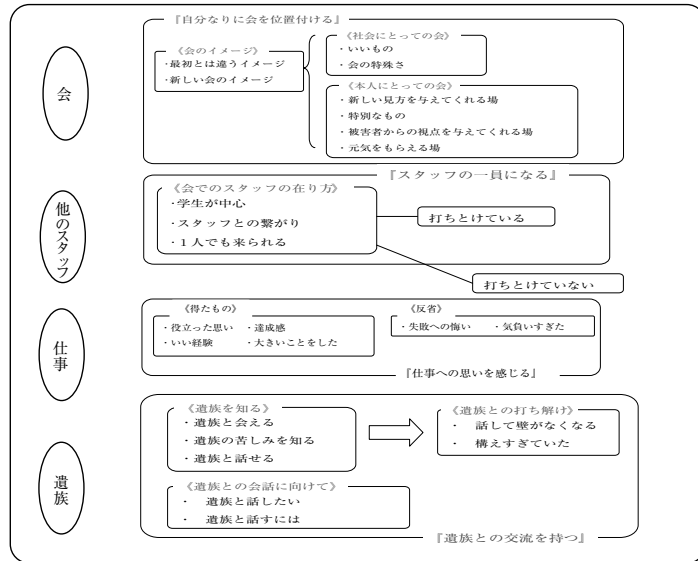
3. 参加後

図3-4は【Ⅲ. 参加後】という段階を図示したものである。参加者が会へ参加してから会や仕事、他のスタッフ、遺族について考え直しや振り返りをしている段階である。

1) 会について

会について振り返りをした参加者は、「自分の思っていた被害者支援とは違う [B-26]」や「会と聞いただけで、（遺族の）叫びを感じるくらい。それぐらいに（遺族が）耐えているというイメージが付いた。[J-81]」というように、“最初とは違うイメージ”や“新しい会のイメージ”というものを持っていることがわかった。これらをまとめて《会のイメージ》とした。新しい《会のイメージ》を具体的に見ると《社会にとっての会》と《本人にとっての会》という2つの概念に分けられる。《社会にとっての会》には“いいもの”、“会の特殊さ”という2つのグループが含まれている。「学生中心のボランティアってあまり聞かない。…デリケートなところは専門家がやるもん。他の被害者支援のところは専門家が多い [F-122、F-123]」というように、会の特殊性を感じている語りがあった。《本人にとっての会》には“新しい見方を与えてくれる場”、“特別なもの”、“被害者からの視点を与えてくれる場”“元気をもらえる場”というグループが含まれている。参加者は「感じたことがないものを感じさせてもらえる場所 [I-50]」や「居場所のあるボランティア [F-112]」と感じている。そのような中で「元気をもらえる場所です [D-106]」という語りはとても興味深い。この他、「こっちがありがとうございます [F-27]」と語る参加者もあり、活動を通して参加者自身が何かをもらっていると感じる体験をしていることも示された。このように《会のイメージ》を持ち《社会にとっての会》や《自分にとっての会》を感じている過程を『自分なりに会を位置付ける』というカテゴリーとした。

図3-4 会参加後の参加者の態度



2) 他のスタッフ

他のスタッフについて見てみると、参加者は会への参加を通して《会でのスタッフの在り方》に気がついている。「学生がいなくて無理 [J-101]」、「必死でやっているのがすごい。自分の中でも、他の人も。[F-118]」と語っている。これらを“学生が中心”、“スタッフの繋がり”“1人でも来られる”というグループとし、《会でのスタッフの在り方》の中に入れた。《会でのスタッフの在り方》というものを感じた参加者は、それに“打ちとけている”と感ずることもあれば“打ちとけていない”と感ずることもある。これは、参加への思いや、参加時の人間関係が関係していると考えられる。また、会への参加を重ねることで変化するものでもあると思われる。このように、《会でのスタッフの在り方》を知った参加者が、自分がそこに“打ちとけた”と感じた過程を『スタッフの一員になる』というカテゴリーとした。一方、“打ちとけていない”と感ずる参加者は、他のスタッフとの関係の中ではなく、他の対象で落ち着きを見出すことになる。そして、他の対象でも落ち着きを得るものを見出すことができなければ、参加自体が続かないということになると考えられる。今後自分が会に関わるかどうかを聞かれた際、「自分で作り出すエネルギーがそこ（会）に向けられるか」というと、今のところそういう志向があまり感じられない [A-34]」と語った参加者は次の参加をやめている。

3) 仕事

仕事について見てみると、《得たもの》、《反省》という2つの概念が存在している。《得たもの》には「お手伝いとかじゃなくて、学生が中心にやっているのが大きい [F-91]」と語る“役立った思い”や「達成感じゃないですけど。そんな感覚があった [I-42]」と語る“達成感”、“いい経験”“大きいことをした”というものが含まれる。参加当初感じていた自己否定的な感

じも、「僕1人でやった…俺がやったんだという感じにはなる [J-61]」というように自分がいたから出来たという肯定的な感じを持っていることも示されている。

一方で、《反省》には“失敗への思い”、“気負いすぎた”というグループが含まれている。前節でも挙げたが、任された仕事で失敗をした参加者は、その思いを強く心に刻んでいることが語りうかがえた。しかし、その思いが「次は絶対に（失敗）しないようにしたい [D-75]」というように次への強い意欲となって現れている。

4) 遺族

遺族について見てみると、会への参加を通して参加者は《遺族を知る》という体験をしていることがわかる。《遺族を知る》という概念には“遺族と会える”、“遺族の苦しみを知る”、“遺族と話せる”というグループが含まれている。そして、その結果として、「聞いてもいいというのは自分の中にある。被害者の方としゃべってきて、（遺族との間の壁が）無くなって来た [E-100]」というように遺族との距離が縮まった感じや、「こっちが構えすぎやったというのも大きかった [F-17]」というように遺族に対する態度が過剰すぎたということを感じている。この体験を“話して壁がなくなる”“構えすぎていた”というグループとした。

それと同時に参加者は“遺族と話したい”、“遺族と話すには”という気持ちも生じてきている。そして次回には「去年よりしゃべれるかな [B-57]」と感じていることも語られていた。

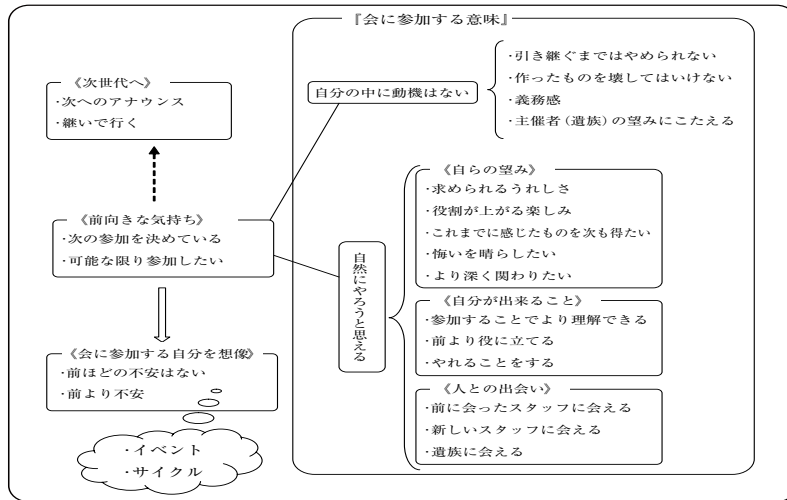
しかし、遺族と話をするのは容易ではない可能性もある。今回の調査で、遺族と話が出来るという語りをしたのは、参加回数が4回以上の参加者に限られていた。反対に、「最後まで、（遺族の方）とは話しにくかった [J-29]」と語る1回目の参加者もいた。遺族と話が出来るには、繰り返しの参加というのが大きな要因の1つになっていることが推測される。

4. 現在（次へ向けて）

図3-5は【IV. 現在】という段階を図示したものである。会を終えた参加者は1年後の次の会に向けて、思いを巡らせて行く。この節では、次への参加へ向けて参加者がどのような態度を示しているかを示していく。

今回の調査では、対象者の大半が今後の“次の参加を決めている”、“可能な限り参加したい”と感じていると語った。これらをまとめて《前向きな気持ち》という概念にした。「会が終わるときも、来年もある [F-82]」と感じていたと語る参加者もいた。そのような気持ちが生じてきた過程をみると“自然にやろうと思える”、“自分の中に動機は無い”という2つのグループがある。前者の中には《自らの望み》、《自分が出来ること》、《人と会の再会》という概念が含まれる。《自らの望み》には“求められるうれしさ”、“役割が上がる楽しみ”、“これまでに感じたものを次でも得たい”、“悔いを晴らしたい”、“より深く関わりたい”というグループが含まれている。具体的に見てみると「（役職が）上るのはうれしい。[E-55]」という役職に対する

図 3-5 現在 (次へ向けて) の参加者の態度



思い、「(悔いを) 晴らしたいと思って [D-88]」という仕事に対する思いなどが語られていた。

《自分ができること》には“参加することでより理解出来る”、“前より役に立てる”、“やれることをする”というグループが含まれている。「去年よりもっと手伝える…お手伝いしたい。[B-35]」とあるように一度体験したことで、もっと何か出来るのではないかという思いや、自発的に何かをしたいという気持ちが生じてきていることがわかる。

《人との再会》には“前のスタッフに会える”、“新しいスタッフに会える”、“遺族に会える”というグループが含まれる。「一緒にやっていた人と、その機会が集まれるというものもある [F-116]」と語るように、他のスタッフの近況を知りたいという気持ちも含まれていた。

後者の“自分の中に動機は無い”にもかかわらず参加を前向きに考えさせるものとしては“引き継ぐまではやめられない”、“作ったものを壊してはいけない”、“義務感”、“主催者 (遺族) の望みに応える”というものがある。「先輩たちが作ってきたものを壊してはいけない [E-67]」、「主催者の方をはじめとする被害者が望むことを、サポートしたい [E-38]」と語るように、会を意識した語りであることがわかる。“自分の中に動機は無い”が参加をしようという気持ちは同じであるため、《自分の中に動機は無い》、《自然にやろうと思える》という2つの概念をまとめて、『会に参加する意味』というカテゴリーとした。

『会に参加する意味』の中に含まれる参加理由を見てみると、本研究の分析段階で、語りの対象として挙げられた会・他のスタッフ・仕事・遺族のいずれかに関係することがわかる。参加者は、会・他のスタッフ・仕事・遺族という対象のいずれかに — 複数である場合もある — 自分なりに参加する意味を見出していることがわかる。その結果が、次の会への参加につながっていることがわかる。

《前向きな気持ち》を持つ参加者は、“会に参加する自分”を想像し“前より不安”もしくは

“前ほどの不安はない”状態で過ごしている。そして、次の会へ参加し、会・その他のスタッフ・仕事・遺族に対しその時の自分なりの関わりをし、また態度を変容させていく。

「また来年という感じ。習慣のよう… [F-83]」、「サイクルになってしまいました [E-58]」と語り、この会を“イベント”“サイクル”と感じていることも語られている。

また、参加者は、自分だけではなく次の参加者についても考えをめぐらせている。“次へのアナウンス”、“継いでいく”というグループが存在する。「活動として、こういうのもあるんだよというのは知っていてもいいかなと思った、時間があれば来て欲しい [B-56]」や「継いで行ってもらいたい、先輩から言われたというのもある [I-46]」と知り合いや後輩に次回以降の参加を促す気持ちがあることもわかる。この2つのグループを整理し《次世代へ》という概念とした。この気持ちが次の参加者の【I. 参加前】の《知る》につながっていくことが予想される。

5. その他

参加者が活動を通じて【V. 得たもの】や【VI. その他】に感じたことを見ていきたい。図3-6は【V. 得たもの】について図示したものである。

図3-6 会から得たもの

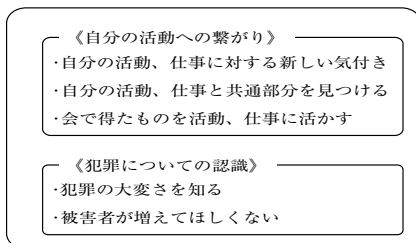
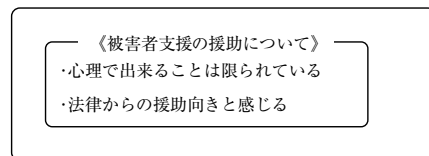


図3-7 その他



【V. 得たもの】（図3-6）を整理してみると、《自分の活動への繋がり》と《犯罪についての認識》という2つの概念に整理された。《自分の活動への繋がり》には、“自分の活動、仕事に対する新しい気付き”、“自分の活動、仕事と共通部分を見つける”、“この会で得たものを活動、仕事に活かす”というグループが含まれている。「自分たちの活動と似ている [B-30]」や「仕事をしていて、（活動と）リンクしている [G-95]」と語るように会での経験が、自分の分野にフィードバックされていることがわかる。

《犯罪についての認識》には“犯罪の大変さを知る”“被害者が増えてほしくない”というグループが含まれている。「犯罪全般が完全に重いということを感じた。ちょっとした悪いことも出来ない [J-70]」、「被害者が増えるのは止めたい [G-107]」と言うように、遺族の苦しみを知った参加者が、同じ思いをさせるような人を増やしたくないという思いや、会に参加する遺族が増えることに対して「殺された人が増えたから、遺族が増えたって言うこと。すごい悲しい [G-124]」という参加者の思いが反映されたものである。

続いて【VI. その他】（図3-7）は、《犯罪被害者の援助について》という1つの概念に整理された。「心理って意味あるのかなというのはあった。[D-26]」というように“心理で出来る

ことは限られている”という感じ、「法律とか、そういう側面からのほうが救われる [K-8]」と“法律からの援助向きとを感じる”というものがあつた。被害者の実情を見聞し、心理という分野が出来ることに限界を感じている参加者がいることもわかる。

第4章 考察

本論文の目的であるボランティア参加者たちが活動を通してどのようなことを感じているか、その体験の意味づけがどのように変容しているかについては、3章で彼らの語りを図示することにより明らかにした。本章では、3章の結果をもとに参加者が被害者支援に臨む態度の変容について考察を加えていく。

1. 参加当初の不安の変容

参加当初の参加者の態度として目を引くのが、会への参加に対する不安な気持ちである。会への参加前には不安な気持ちを抱き、会への参加当初も会・他のスタッフ・仕事・遺族というそれぞれに対して不安や心配する気持ちを抱えていた。そんな参加者の態度を動かす1つのきっかけとして示されたのが、『知る人間の有無』という概念であつたのではないかと考えられる。ここから、新しい参加者に対し、知り合いが適宜フォローを入れることで、新しい参加者は会への参加に対して前向きになっていけるのではないかと思われる。実際、自分が後輩を連れてきた経験を持つ参加者は「一人で行ったら不安ですから。誰かがついていって、橋渡しをしてあげたら [D-102]」と語っていた。これは、自分が最初不安だったことを経験しているからこそ持てる感情ではないだろうか。それを乗り越えたことにより次の参加者への気遣いという態度を持てるようになるのではないだろうか。

2. 被害者への態度の変容

では、参加の中で起こってきた、その他の態度の変容についてはどうだろうか。宮澤 (2000) は被害者支援を「被害を受けた人の立ち直りを支え、立ち直らせるための「助言」、そのために必要なサービスを行うこと」という定義している。⁽⁶⁾ この定義を参考に会の活動を見直すと、参加者の遺族への態度がもっとも近いといえる。参加当初、遺族と接することに不安を感じていた参加者が、会への参加を通じて、最終的には遺族との間に壁が無いと感じるまでに態度が変容していた。この態度変容について考えてみたい。

最初は遺族と接する不安があつたという態度について、本研究ではそれを反証する語りは出てこなかった。「変なこと言ってしまったら怖い…傷つけそう [J-30]」や「学生を見て、子どもも何もなく育ってたら、これぐらいになってたんじゃないとか、そういう思いをされるのではないかと思ったら…壁を感じて [G-4、G-5]」というに、遺族を傷つけてしまうのではな

いかという不安だけでなく、自分の存在でも遺族に影響を与えてしまうのではないかとさえ感じていた。

遺族の態度の最初の変容と思われるのが当初感じていた遺族に対するイメージが変化した段階といえる。「被害者というのではなくて、人。…自分の中の壁がちょっとは崩れた [E-101、E-102]」や「楽しくしたらダメというのではないけど。見方も変わった [F-15]」というように遺族を悲惨な体験をした人というイメージだけでなく、新しいイメージを得たことがわかる。

多田（2000）は「被害者支援の活動に参加するボランティアは、被害者が受ける衝撃やその深さに、少しでも近づくことが出来れば、活動の出発点に立つことができる」と述べている。⁽²⁾ 被害者が受ける衝撃やその深さを知ることは大切だが、「余計なこと言ったらどうしよう。資料とか読んで、がんばってねとか言われたら一番傷つくとか。…刷り込みですよ [F-20]」とあるように、かえって支援者が身動きを取れなくなる可能性があることも示された。

遺族の新しいイメージを持った支援者は、「気は使うけど、昔ほどではない。[E-96]」というように遺族との距離を縮めることができている。そして「話し出したら、（事件のことを）聞く [E-97]」と遺族と話が出来るようになっていく。そう思えるようになったのは「（遺族と）話してきたから。横で事件のことを話して下さった被害者の方もいた [E-98]」、「被害者の方が、話しかけてくれた [G-40]」と遺族と話す体験を挙げている。遺族と接し始めた当初、どう振舞っていいか分からなかった参加者は、遺族からの働きかけにより支援者としての自覚を持ち始め、こちらから話しかけることが出来るようになっていく。

しかし、この変容には時間がかかることも示された。遺族と話す体験を語った参加者は11人の対象者のうち2人のみだった。その2人ともが4回以上参加をしている参加者である。反対に1回の参加者は、「遺族は、話しかけにくい…（話しに）行けなかった [J-90]」と語るように、遺族と話が出来る状態になっていなかった。しかし、＜遺族と話すことが出来たらいいと思う？＞という筆者の問いに「正直あります [J-35]」と答えている。現在遺族と話が出来ない理由として「知り合って長くないから、無理と思う [J-32]」と知り合ってから時間の短さを挙げている。しかし、時間が経てばという条件ではあるが「出来そうな気がします。[J-33]」と感じており、1回の参加でも遺族に対する心理的距離感は縮まっていることがうかがえる。

遺族と話が出来るようになって、参加者はその思いを聞くことにより戸惑いを感じていたことも示された。「涙を流しながら、そういうこと（事件のこと）を話しているときには、かけられる言葉が無かった [G-67]」、「どうしたらいいんやろと思う [G-69]」と語るものである。B.H.スタム（2003）は援助者であることもまたリスクを負う、人びとをケアすることで時には、相手の外傷性の体験に晒され直接の結果として苦痛を経験することもあると述べている。⁽⁸⁾ 遺族の体験に耳を傾け始めた彼らはまさにそのような経験をしていたのではないかとと思われる。

そのような彼らの態度を変容させるものとしてはまたしても遺族からの働きかけであった。「聞いてくれてありがとう、すっきりしたと言ってくれた [G-42]」、「年に1回の会が、会の人

たちにとっては、心から笑えるし、泣けるし、子どものことも話せるし、・・・すごく大事と言ってくれた [G-33]」と、遺族は、正直に自分の感情を話せることがすごく大事であると参加者に伝えていることがわかる。参加者は、そういう遺族の気持ちに触れることで「自分が関わっていることで、すごくうれしいって言ってくれると思ったら、何も怖いと思うことは無い [G-48]」、「(自分) 話してくれたんと思ったら、すごく嬉しい [G-63]」と感じ、遺族の話を聞くことに対して意味づけを行っている。

通常の被害者支援を考えると外傷性の体験をした遺族と、それを支える支援者という図式が成立するが、この会では必ずしも遺族と参加者がその図式にいるわけではない。「わざわざ横に来て、最近どうなのって言ったり、いろんな話をしてくれたり [G-89]」と遺族が参加者へ気遣いを見せることもある。「専門家も被害者も学生を覚えていて、学生の方も(遺族を)覚えていて。…そういう意味では、そこの絆は強い。[E-32、E-33]」というように会特有の関係を語っている。その関係を体験することにより「遠いと思っていたものが、無くなり、今では遺族の方と色んな話を [G-38]」という態度に至っている。

3. 会へのかかわり方からの変容

ここまでは、遺族と接する態度について会への参加回数という視点を中心に見てきた。では、会への参加回数が少ない参加者は、会への参加をどう感じているのだろうか。それを示しているのが、遺族以外の語りの対象に対しての態度の変容である。

この会への関わり方の特徴として、参加したボランティアが会の運営に主体的に関われることがある。二宮(2000)はLD児に関わるボランティアを対象とした研究の中で、会の運営について考えることで、構成員の主体的な関わりを促すことになる」と述べている。⁽⁸⁾この会でも「自分で提案したり、企画したりしたほうが、よりいいものができている気がする。この会もそんな感じ。ただやるよりも…モチベーションもある [B-52、B-53]」と述べる参加者がいる。

また、二宮(2000)はボランティア参加者が、活動を通じて様々な視点を持つことが出来るようになると述べている。⁽⁹⁾会の参加者も「新しい見方を与えてくれる場所、自分を成長させてくれる場 [D-104]」、「被害者側からじゃないと見えないことがあるということを感じが付けられる [I-47]」と語り、活動を通して新しい視点を得ていることがわかる。参加者は、新しい視点を得た経験から“これまでに感じたものを次も得たい”という態度を持ち、次回への参加につながっていると考えられる。

仕事に目を向けると、参加当初自己否定的な感じを持っていた参加者は、仕事をこなすことで、役に立っていると言う肯定的な態度を持つようになる。馬場ほか(2005)は自己効力感という視点でボランティア活動に対して考察する中で、活動を通して自分の持つ力に気づき、その結果、活動すること、相手を思うこと、そして相手を尊重することを、体験を通じて学び、また、意識を向上していくと述べている。⁽⁹⁾会の参加者は、仕事を通じて自分の持つ力に気づ

き、被害者を思う気持ちという支援者としての意識が向上していくのではないだろうか。

そして、活動をする参加者は、「楽しいって言ったら変だけど [G-44]」、「普通に楽しく話して [G-134]」、「やってて楽しかった [I-39]」、「楽しいとか、面白いと思っていた [K-59]」と会での活動を楽しみ体験と語っている。三木 (2000) は被害者支援での留意点として傾聴・受容・共感に努めること、自己理解に努めること、そして楽しむことという3つのポイントを挙げている。⁽¹¹⁾会の参加者は、遺族の話を聞く、活動を通して自分を考える、そして活動で楽しむという形でこの3点をこなしているのではないだろうか。また、この会は、そうした体験が出来る環境が自然に出来上がっているのではないかと思われる。

〔注〕

- (1) 瀬川晃 2000「被害者支援の歩み」『犯罪被害者の支援の基礎』瀬川晃編 東京法令出版
- (2) 多田治夫 2000「支援活動に必要な知識・技能」
『犯罪被害者に対する民間支援』大谷實・山上皓編 東京法令出版
- (3) 金子進之助 2006「犯罪被害者支援活動についての報告」
別府大学短期大学部紀要 25 p.99-105
- (4) 集会のパンフレットを筆者が要約
- (5) 川喜田二郎 1967『発想法』中公新書
- (6) 宮澤浩一 2000「被害者支援の意義」『犯罪被害者の支援の基礎』瀬川晃編 東京法令出版
- (7) B.H.スタム 2003『二次的外傷性ストレス 臨床家、研究者、教育者のためのセルフケアの問題』
(小西聖子・金田ユリ子訳) 誠信書房
- (8) 二宮信一 2000 障害児プログラム指導ボランティアの意識変化についての一考察 - 北海道YMCA学習障害児のクラスから - 社会教育研究 19 p.57-71
- (9) 馬場由美子・島かおり・大宅顕一郎 2006「学生のボランティア活動と社会的スキルの変化に関する一考察」佐賀短期大学紀要 36 p.155-162
- (10) 三木善彦 2000「犯罪被害者支援におけるスーパービジョン」『現代のエスプリ』
395 p.139 - 149 至文堂

(あだち やすもり 教育学研究科臨床心理学専攻修士課程修了)

(指導：石原 宏 講師)

2008年9月30日受理